

会員数(54・6月現在)

逗子地区 127名

葉山地区 199名

大船地区 62名

合計 388名

吟道月報

日本詩吟学院風会 認可
神奈川 碩心会 発行

54年 6月

才83号

発行者

根 岸 岳 萃
稿 村 集
中 風
秋 梁 風

私と詩吟

沼間支部 松野春風

私が詩吟を始めたのは昭和十一年で当時青年学校時代に木田先生に学び川中島、金州城、訣別、壁に題す、偶成等を教えられた。

その後昭和十四年に召集され甲府の歩兵四十九聯隊に入隊のち支那大陸に渡り三年六月、満洲に下りおりました。そんなわけで中国篇を吟じますと洞庭湖、蘇州、寒山寺、南京の城壁その他中国の風景がまのあたりに浮んできます。

月日の経つのは早いものでその後四十二年に三井先生を迎え、故人となられた黒田老風氏等と沼間会館で吟を始めてからもう十余年とになりました。

吟を始める前の私は胃腸が弱く

で困っておりましたが、心で詩を愛し腹部に力を入れて朗詠するといかいつのまにか体の調子もよくなり、今では胃の調子もすっきりよくなりました。

今後共朗詠を通じて心身の鍛錬につとめ、長寿への希望に一步一步進んでゆきたいと思ひます。皆様詩吟を愛して健康を守りましょう。

或るお弟子さんの思ひ出(後篇)

三井雲岳

あと一年で定年となる六十一文の時、詩吟を習いたいと氏がきた。そこで氏の受持ちの倉庫で昼休みの四十分を使い週四五回やる事にした。氏の声はきわめて低く水田本位のかさかさした声でいくら力んでも細々と

した声しが出ずその上仲々節もとれなかつたので毎日々々一題宛くり返レ／＼声を出させしる事に苦心した。時折前を通る仲間が一向にうまくならない氏をひやがすつもりで入ってきても余りにも真剣な氏の顔を見て黙ってしまふ、次の日の吟題をいふと薄紙に書き下し符付をし、一年近くは人の四五倍勉強しこれならなんとかという所まで進んだ。その頃には例の薄紙の綴りも大分厚くなった。

定年後一時家の近くの先生についたのだが、気に入らず半年位で福心会に入る事になり、仲間五名で沼田支部を発足、私が指導に行く事になったのだが何時もイの一番に来て〇〇をやりますから聞いて下さいという。松井先生の長詩誦読が大好きで、私のテロブを賞してあげると藤田東湖の正気の歌、虞美人草、白頭翁等完全に暗記しこなしていた、何処へゆくにも例の薄紙の綴りを持ち、三綴り百五十題位になっていたと思う、自分の氣にいった詩は五十回練習したから聞いて下さいとは

くいたものだ。

又後輩の面倒見もよく我が身につまされてか事細かに注意し励ましていた。入院中同室の若い人に吟を教え、その人が覚えがよいので我が事のように喜んでいた。私が氏を見舞った時「三ヶ月です、舟艇守の尺八を聞いて々々て下さい」といわれびっくりしたが韻読までよくこなして、本人の素履もあろうが氏の指導の熱心さをしみじみ感じた。

こつこつとつまずたゆまず積みあげて行く上、年令的、素履的なものゝりこえて立派な吟が出来るといふことになるものだ、という絶好の例を黒田氏に見ることができた。以上

◎ 宗範展墓参加のおねがい 企画部より

現在の参加者七五名に付、できる事なら百名位の参加がほしいので、ぜひ御協力をお願いします。参加希望は企画部又は支部長まで。

神奈川県本部

とき。六月十七日(日)

二十五周年記念大会 ところ。藤沢市民会館

三浦一族史蹟めぐり

一穂々々長

中村愛風

脇田穂岳作

三浦新井城墓前にて

晩秋の落日城跡を尋ぬ

風は寒し寂漠として人影もなれ

墓前に涙してれば往時を憶へば

松籟の音は悲し興亡の空しさ

討つものも討たるものもわからけよ

くだけてのちはもとの土くぬぐ

あゝ哀れむ義同父子

盃を碎き死を決す無念の涙

(註・父子とは三浦道寸義同と荒次郎義意)

この度脇田先生から右の詩文をいただいたとき

振付けをさせていたゞく事になり来る六月十日

日に三浦青少年会館にて先生の吟で発表されて

いたただく事になりました

詩文をいただいた時何となく素直に詩文に

とけこめさうな気がしてお受けしたのですか

ふと私の頭に浮んだのは折も折今テレビで草

燃えろがフィルムでもあるし身近な三浦半島の史蹟をも

う一度見つめて見よう、さうしなならば舞に

も尚一層の情感が盛りこめるのではないかと

いうことでした。この事をふと吟友にもらし

ましたところ、意を同じくする吟友仲間八人

忽ち意気投合し、たま／＼新田先生作の風雲

新井城をよく導けらる剣舞の並木先生もぜひ

行きたいという事で好天の五月十三日先生を加えカメ

ラを肩に二台の車に分乗出発いたしました。

実行に先立ってはメンバーの一人秋元先生が

わざ／＼バイクで奥地検分をして下さり、三

浦氏の系図及び参考資料等プリントして下さ

るといふ熱の人れようでした。

次に参考までに当日のコース順を記してみ

たいと思います。午前十時葉山出発、年代順

という事でまず衣笠城跡(三浦大介89才で最後

を遂げた城跡)：満昌寺(大介の功をねぎらい頼

朝が建立・大介の首塚と御霊神社)：近殿神社

(大介の二男三浦介義澄の墓とその子義村の霊

を祀る)：清雲寺(三浦の始祖、為通、為継、義継

三代の墓)：腹切松をみて国道134号線を海沿

いに南下、三浦海岸駅近くの来福寺に(大介の
 孫和田義盛像を祀る)そして更に南へ金田の寿
 福寺とその近く岩浦の丘の義村の墓へ・義村
 の遺言により海の見えるこの岩浦の丘に建て
 られた由、車はさんさんとふりやそぐ太陽の
 下に光るピニールに覆われた広々とした西瓜畑
 の中をひた走る。三浦半島に住んでいてつい
 で来た事の無い半島の南端をどこか遠い地へ
 来た様な気持ちで窓外の景色にみとれつつ走
 る。そして歌で知られる通り矢を抜け見桃寺、
 大橋寺等を経て歌舞島で一服、ここはその昔
 鎌倉武士達が宴を催したといわれる所ですが
 ここからみる眺めは素晴らしく特に夕景は又
 格別とか；そしていよいよ新井城跡へ！鬱蒼
 とした樹木に囲まれ三方を海に囲まれたこの
 新井城跡を尋ねた時、まざまざと往時の事が
 頭の中を去来する。北條早雲と三年間にわた
 り戦い遂に永正十一年七月十一日の夏の朝新
 井城は陥落、三浦父子は自らの刃に臥せたと
 いう。連日の激戦で海にとびこんだ彼我の兵

士の血汐で海面が油の如くなり人呼んで油壺
 となつたという。次にマリナーパークを右に少
 し下ると父子の墓が別々にある。足下の切り
 立つ崖下がすぐ海のここ道寸の墓は私が脇田
 先生の詩文で想像していた風景とまさにひっ
 たりだった事に我ながらびっくりました。
 同行の並木先生は墓に詣でた時思わず体がツ
 ク／＼するのを覚えたという。脇田先生に先
 んじて申し訳ないと思いましたが墓前で詩の
 朗詠を行い感無量で墓前を後にしました。
 紙面の都合でスラ／＼書きましたが、その
 あと和田義盛塚、荒崎城跡の荒崎を尋ねそ
 ろろ落日も近い荒崎の景観に心ひかれつつ帰
 路につきました。

(一人) △△

(堀内支部)石塚かつみ 兼山町一色三六(宅)七六一三九

(諏訪支部) 角田さとし 兼山町堀内五七(宅)七五二一三四

(退) △△

138 横山和山 192 鈴木深山 209 加藤幸泉 224 関野志泉

225 城戸歌泉 274 岩田和泉 角田すみ江